

## 主日礼拝説教「神の恵みをお知らせします」

日本基督教団石神井教会 2017年7月2日

### 【旧約聖書日課】申命記 26章1～11節

<sup>1</sup>あなたの神、主が嗣業の土地として得させるために与えられる土地にあなたが入り、そこに住むときには、<sup>2</sup>あなたの神、主が与えられる土地から取れるあらゆる地の実りの初物を取って籠に入れ、あなたの神、主がその名を置くために選ばれる場所に行きなさい。<sup>3</sup>あなたは、そのとき任に就いている祭司のもとに行き、「今日、わたしはあなたの神、主の御前に報告いたします。わたしは、主がわたしたちに与えると先祖たちに誓われた土地に入りました」と言いなさい。<sup>4</sup>祭司はあなたの手から籠を受け取って、あなたの神、主の祭壇の前に供える。

<sup>5</sup>あなたはあなたの神、主の前で次のように告白しなさい。

「わたしの先祖は、滅びゆく一アラム人であり、わずかな人を伴ってエジプトに下り、そこに寄留しました。しかしそこで、強くて数の多い、大いなる国民になりました。<sup>6</sup>エジプト人はこのわたしたちを虐げ、苦しめ、重労働を課しました。<sup>7</sup>わたしたちが先祖の神、主に助けを求めると、主はわたしたちの声を聞き、わたしたちの受けた苦しみと労苦と虐げを御覧になり、<sup>8</sup>力ある御手と御腕を伸ばし、大いなる恐るべきこととしるしと奇跡をもってわたしたちをエジプトから導き出し、<sup>9</sup>この所に導き入れて乳と蜜の流れるこの土地を与えられました。<sup>10</sup>わたしは、主が与えられた地の実りの初物を、今、ここに持って参りました。」

あなたはそれから、あなたの神、主の前にそれを供え、あなたの神、主の前にひれ伏し、<sup>11</sup>あなたの神、主があなたとあなたの家族に与えられたすべての賜物を、レビ人およびあなたの中に住んでいる寄留者と共に喜び祝いなさい。

### 【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二 8章1～7節

<sup>1</sup>兄弟たち、マケドニア州の諸教会に与えられた神の恵みについて知らせましょう。<sup>2</sup>彼らは苦しみによる激しい試練を受けていたのに、その満ち満ちた喜びと極度の貧しきがあふれ出て、人に惜しまず施す豊かさとなったということです。<sup>3</sup>わたしは証しますが、彼らは力に応じて、また力以上に、自分から進んで、<sup>4</sup>聖なる者たちを助けるための慈善の業と奉仕に参加させてほしいと、しきりにわたしたちに願い出たのでした。<sup>5</sup>また、わたしたちの期待以上に、彼らはまず主に、次いで、神の御心にそってわたしたちにも自分自身を献げたので、<sup>6</sup>わたしたちはテトスに、この慈善の業をあなたがたの間で始めたからには、やり遂げるようにと勧めました。<sup>7</sup>あなたがたは信仰、言葉、知識、あらゆる熱心、わたしたちから受ける愛など、すべての点で豊かなのですから、この慈善の業においても豊かな者となりなさい。

### 【福音書日課】マタイによる福音書 5章21～26節

<sup>21</sup>「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。<sup>22</sup>しかし、わたしは言うておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。<sup>23</sup>だから、あなたが祭壇に供え物を献げようとし、兄弟が自分に反感を持っているのをそこで思い出したなら、<sup>24</sup>その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい。<sup>25</sup>あなたを訴える人と一緒に道を行く場合、途中で早く和解しなさい。さもないと、その人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれるにちがいない。<sup>26</sup>はっきり言うておく。最後の一ケドランスを返すまで、決してそこから出ることはできない。」

## すべては《恵み》から始まった

先主日は、石神井教会出身の牧師である S 先生にゲストとしておいでいただき、二つの礼拝に加えて午後の講演のご奉仕もいただきました。

S 先生のご奉仕くださった午前中の礼拝では、旧約聖書の出エジプト記から説き明かしていただきました。モーセがエジプトで奴隷状態にあったイスラエルの民を導き出して、エジプトを出てすぐ、行く手に海が立ちふさがり、後ろにはエジプトからの追手の軍隊が迫り、二進も三進も行かなくなったところで、神が行く手の海を二つに割いて道を拓いてくださり、その先に進むことができた、という箇所です。

その後、イスラエルの民は、神が拓いてくださった道に進み行きましたが、すぐに問題に突き当たりました。エジプトから持ち出した食料が底をついてしまったのです。民は、モーセに不平を漏らしました。「エジプトにいたときには、肉もパンも腹いっぱい食べられたのに。モーセは、自分たちをエジプトから連れ出して、この荒れ野で飢え死にさせ、絶えさせてしまうつもりなのか」。そのとき、モーセの祈りに応えて神がお与えくださったのが、「マナ」と呼ばれる天からのパンでした。イスラエルの民は、四十年間の荒れ野の旅の間、神のお与えくださる「マナ」を食べて、生き永らえたのです。

その四十年の荒れ野の旅を終えて、いよいよ、神が約束くださっていた土地に入っていこうというときに、モーセが、あらためて四十年の歩みを振り返りながら、これから入っていく土地で守るべき事柄を語り教えたものをまとめたのが、今日、旧約日課として朗読を聞いた「申命記」です。申命記は、主イエスが弟子たちに教えられたときにもしばしば引用された聖書です。主イエスが荒れ野の誘惑の際に引用された、「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」という有名な言葉も、申命記 8:3 の御言葉ですが、この御言葉は、マナの出来事と結びつけて語られたものです。神がマナを食べさせられたのは、そのことを知らせるためであった、というのです。

もう少し丁寧に申命記を聞き直してみるならば、モーセは、これからいよいよ約束の土地に入っていこうというイスラエルの民に対して、繰り返し、「あなたたちが得る土地は、神が与えられた土地なのだ」ということ、決して「自分の力と手の働きで、この富を築いたなどと考えるはならない」(8:17)ということ、強調して教えていることに気づきます。そして、その教えのいわば総まとめとも言えるのが、今日朗読を聞いた 26 章だと言ってよいでしょう。

新しく得た土地に入っていくときに、真っ先に、あなたの神、主の御前に進み出て、献げ物をもって礼拝をささげなさい、とモーセを命じています。そのとき告白すべきことは、自分たちは、放っておけば滅び去ってしまう存在であったのに、神が御手をもって導きだしてくださり、日々の恵みをお与えくださった、そして、これからも恵みによって支えてくださるだろう、という信仰です。自分たちの手にあるものは、ただの一つも自分自身の力で得た物ではなく、すべては賜物として神からお与えいただいたもの。そう告白するのです。

## 与えられた《恵み》だから分かち合う

わたしたちの信仰告白の原点も、ここに 있습니다。あるいは、わたしたちの献げる礼拝の原点も、ここに 있습니다。そして、もちろん、わたしたちが礼拝の中で献げる献げ物の原点も、ここにあるとすることができます。

わたしども牧師は、しばしば、先人の知恵として、「牧師は教会で献金や教会会計のことで発言しない方がよい」ということを心に留めているものです。それと共に、「牧師は教会で年に一度は献金についての信仰的な考え方をきちんと教えるべきだ」ということも、先人から受け継いでいます。できれば、あまり語りたくないのです。けれども、聖書には確かに、献げ物についての教えが記されているのですから、それを無視するわけにはいきません。そこで、わたしどもも、意図的にではなく、日課で与えられる御言葉の範囲で、皆さんと分かち合うことをお許しいただきたいのです。いいえ、御言葉として神から与えられている恵みであればこそ、このことを分かち合わずに済ませるわけにはいかないでしょう。

申命記の御言葉で、神の御前に進み出て献げたものは、その場で、家族や共に生活しているすべての人たちと分かち合うように、命じられていました。このような営みを、世界最古の社会福祉制度だと評する人もいます。確かに、そのようなものとして考えられていることでもあるのでしょう。別の箇所でも命じられる「十分の一の献げ物」などは、そういう制度としての意味があったのかもしれませんが。けれども、今日の御言葉で告げられていることは、確かに命令として語られていますが、どうも、献げる者の自発的な行為として期待されていることのようなのです。

そのような自発性は、新約の教えになると明白です。パウロがコリントの教会に宛てて記した手紙で教える**慈善の業**、つまり貧しい者のために集める献金は、続く箇所を読み進めていけばさらに明白ですが、飽くまで自発的な行いとして期待されているのです。けれども、それは、何かわたしたち信仰者に良き志や善意があることを期待して、そう教えられているわけではなさそうです。そうではなく、パウロは、モーセが繰り返したように、そもそもすべては神の恵みだから、ということをお思い起こさせるのです。実は、ここで「慈善の業」と訳されている語と、神の「恵み」と訳されている語は、同じ「カリス」という語です。「慈善の業」は、神の「恵み」そのものが根拠になっている。そのことを思い起こさせながらパウロは、そのことによってこそ、信仰者は、自発的に献げ、他の者、特に貧しい者と分かち合うようになると、期待している、と言ってよいでしょう。

確かに、すべてわたしたちの手にする物は本質的に神から与えられた恵みの賜物なのだとすることを認めたならば、そう簡単に、それを独占することはできないでしょう。今、わたしが手にしているものは、たまたま、神から託され、預けられているものであって、すべての者の神である方がすべての者に等しく分け隔てなく与えようとされていると思えば、この手に握りしめ続けることはできないでしょう。制度や掟だからではなく、信仰のゆえに、神への信頼のゆえに、与えられた恵みの賜物を、他の者と分かち合わないわけにはいかないのです。

## 《恵み》が行き渡るまで

そうすると、わたしたちが礼拝の中で献げ物をするとき、「感謝のしるしとして」と言うのは、間違いではないかもしれませんが、誤解を招く言い方かもしれません。わたしたちが献げ物をするのは、神に何か良いことをしていただいたからと「お礼」のためにしているわけではないですし、ましてや、神に何か良いことをしてもらおうと期待して「前金」を支払っているわけでもないのです。比較するのはおかしいのですが、牧師が受け取る給与を「謝儀」と呼んだり、「謝礼」として受け取ったりするのは、まさにそれがあある働きに対する「感謝のしるし」であるからでしょう。しかし、牧師に対するものと神に対するものが混同されてしまうならば、考え直さなければいけません。そこで、最近は多くの教会で、献金のことを「信仰と献身のしるし」と言い表すのです。すべてのものを恵みの賜物としてお与えくださる神に対する信仰・信頼と、その神に一切を(自分の命をも)与えられた者として自分自身を神の御前に差し出し、他者と分かち合う器にさせていただく献身の志を、献金の営みを通して言い表すのです。

ですから、礼拝の献金に際して、用意してきたものが無いとあって、じっと俯いて献金籠が通り過ぎるのを待つ必要はないのです。そのときこそ、信仰と献身の思いを新たにできる機会です。何も持たない自分が、神の大いなる恵みによって生かされていることに思いを馳せ、自分自身をすべて献げる献身の志を新たにしたらよいのです。そのような思いが新たにされたならば、献金として献げる物も、今までとは大きく違ったものになっていくのではないのでしょうか。

500年前、宗教改革者たちが強調した言葉の一つが「恵み」であったということをご存じの方も多いでしょう。しかし、もちろん、今の時代すでに、「恵み」の強調は宗教改革者たちの教会(プロテスタント)だけが強調していることではありません。むしろ、この点に関しては、「後の者が先になる」ということさえ、今、危機感をもって語られることがあるのです。

そう、わたしたちは皆、神のお与えくださる「恵み」によって生かされているのです。そうであれば、その「恵み」の命から、ただの一人も漏れ落ちてしまうことを望みません。今日の福音書で、主イエスは、「殺すな」という戒めをお教えになられた中で、「**兄弟が自分に反感を持っているのを…思い出したら**」祭壇で供え物をするのをやめて、仲直りしに行きなさい、とお教えになられていました。自分に反感を持っているものをそのまま放置することは、その相手を「殺す」ことになるからです。神の「恵み」によって生きるどころから引き離すことになるからです。自分だけが、神の御前に進み出て、恵みを喜び、他の人はどうでも良い、などということは、神の恵みによって生かされているという信仰、神への信頼によって立つ者には、ありえないことです。

わたしたちは皆、神の限りなく豊かな恵みによって生かされているのです。その恵みに先にお応えした者として、教会に加えられてきました。すべてが神の恵みから始まったのです。だからこそ、この恵みを、わたしたちは、あの聖餐桌にお招きくださる真の献身者・主イエスと共に、すべての人と分かち合うのです。